

『小・中間の円滑な接続を！』

私は珍しい経歴を持つ。児童数10人の小学校教頭、校長、生徒数300人規模の中学校教頭、校長と小学校、中学校両方の管理職を経験させてもらった。

教頭になって2校目で初めて中学校勤務を経験した。小学校から見ていた中学校とは違う現場があり、同じ“学校”と名のつく場所なのに違いの大きさにショックを受けたものだ。が、違いを経験させてもらったことで得るものも大きかった。

中学校の授業を見せてもらって思ってきたことのひとつが、小学校の学習内容を押さえずに指導をしていることだった。ちょっと小学校学習指導要領を読んだり、小学校の教科書をのぞいていれば指導が変わるだろうに、“もったいない”と言うのが素直な感想だった。

一方、中学校の指導内容の多さ、授業の進むスピードの速さにも戸惑ったりもした。そんな経験が、今携わっている江差町の小中学校の接続に役立っている。

江差町の小中一貫教育推進に携わって6年目を迎えている。これまでの間、江差町小中一貫教育推進委員会で討議されてきたのは次のような内容だ。中1ギャップ問題が社会問題となっている現在、参考にしてほしい内容である。

#### 小中接続のポイント

##### 互いの指導内容を把握する

小・中学校の教師が互いの学習指導要領をしっかりと読むこと。無駄を省くということはお互いを知らなければできないこと。加えて、実際の授業の中身も知ること。

「総合的な学習の時間」は、学習指導要領に具体的な学習内容は書かれていない。小・中学校で重複しないよう、内容を把握することが必要。

##### 指導方法の違いを理解する

小学校は子どもの発言や話し合いを生かしてきめ細かく指導することを重視。中学校は各教科の専門的な部分まで指導することを重視している。子どもの戸惑いを大きくしないために、互いの指導法の違いを理解し合うこと。

##### 子どもの実態を共有する

中学校は教科担任制で、学級担任が子どもと接する時間は短くなる。そのため、小学校との間で

個々の子どもに関する情報を共有すること。3月末の小中の引継ぎだけでは中学校に入学後、実態把握に時間がかかり、支援が遅れる場合もある。小学校が中学校との「学校連携シート」のような形で子どもの学習や生活の状況を中学校に細かく伝えることは有効な手段である。

#### 学習内容・生活習慣の定着を連続して考える

学習内容の多い中学校で、必要以上に小学校の学習内容の復習に時間を割くことがないよう、小・中学校で学習内容の定着のさせ方を協議することが必要。また、中学校では、家庭での自主学習が小学校以上に求められる。小学校高学年から、こうした学習スタイルを徐々に取り入れるなど、段差を小さくする工夫が求められる。

生徒指導においても同様である。小学校は服装や髪型は比較的自由であるが、中学校は校則で規定される。小学校で許されて中学校ではどうしてダメなのか、子どもが指導方針の違いに戸惑うことがないよう、指導の連携が必要となる。

#### 職員間の交流を活発にする

小・中学校間での職員の交流は授業の質を高める効果も期待できる。中学校の英語教師が小学校の外国語活動の指導に入ることは、中学校の教師にとっては小学校の実態がつかめ、子どもにとっては専門性の高い授業を受けられる良さがある。同様に、他教科でも中学校の専科の教師に指導に入ってもらえば、小規模校でもさまざまな専門の教師を集めることが出来る。中学校とのつながりのある指導がなされることも長所となる。

#### キーパーソンが存在が推進を支える

##### 互いを認め合うことから相互理解を深めていく

小中接続は、意識的・物理的な両面が揃ってはじめて円滑に進む。意識面としては、小・中学校それぞれに培ってきた職員室文化、伝統があり、どちらが「良い」「悪い」ではない。お互いの批判からは何も生まれない。それぞれが認め合い、「子どものために」という共通の目的の下、互いの良さを部分的に取り入れ合うことが必要。校長のリーダーシップが一貫教育推進を支え、職員の意欲を支える。

物理面では、定期的に顔を合わせる機会を設けることが出発点。互いに多忙であることは承知の上。実際に先生同士が向き合って話さなければ相互理解は進まない。

私たちがこれまでやってきた実践は、一足飛びに難しいことをやろうとしてきたわけではない。“できるところから”を合言葉に、小中お互いのやってきたことを認めつつ、互いの学習内容や指導方針を理解し合い、段差や違いに子どもが対応できるよう、連続的に指導を考えてきた。今後も互いの良さを認め合い、校長先生のリードの下、意識面・物理面の両方から接続を円滑化していきたいものだ。